

特 集

地域と連携したヘルスプロモーション事業の今後

野口 眞弓¹

要旨

本学では、開学当初からヘルスプロモーションセンターを設置し、地域と連携したヘルスプロモーション事業や公開講座をとおして、地域の保健、医療、福祉の向上に寄与すべく努力してきた。平成 25 年 3 月には豊田市と本学との包括連携に関する協定が締結され、その下での共同事業として公開講座の共催等を行ってきたが、双方のヘルスプロモーション事業を担当する現場レベルでは、内容や開催時期と地域住民のニーズとの齟齬が顕在化し、連携の在り方を見直すべき時期が来ている。教員の専門性や情報発信に重点を置く公開講座は、企画段階での調整が困難で開催可能時期も限られるため、連携事業に位置付けるには無理がある。今後は、活力ある個性豊かな地域社会の形成と発展及び人材育成への寄与という連携の本来の目的に立ち返り、実質的な協働を含む活動により互酬的な連携を目指す必要がある。

キーワード ヘルスプロモーション 公開講座 連携

I. はじめに

本学では開学当初からヘルスプロモーションセンターを設置し、地域と連携した活動や公開講座をとおして、地域の保健、医療、福祉の向上に寄与すべく努力してきた。平成 24 年までの活動は、本学紀要で報告されている（杉山, 永井, 清水, 2014; 黒川, 2014）。平成 25 年 3 月には豊田市と本学との包括連携に関する協定が締結され、その協定に基づいてヘルスプロモーション事業を実施してきた。ここでは、平成 25 年から平成 29 年までの事業のあゆみと今後の見通しについて述べる。

II. 本学のヘルスプロモーション事業と豊田市との連携

ヘルスプロモーション事業を所管する委員会は、図 1 に示すように、平成 25 年から 26 年までがヘルスプロモーション委員会、平成 27 年から 28 年までがヘルスプロモーション・公開講座委員会、平成 29 年から

年度	担当委員会	豊田市との連携
平成25年	ヘルスプロモーション委員会	豊田市と日本赤十字豊田看護大学との包括連携に関する協定(平成25年3月29日)
平成26年	ヘルスプロモーション委員会	
平成27年	ヘルスプロモーション・公開講座委員会	豊田市と日本赤十字豊田看護大学との包括連携に関する協定(平成28年3月29日)
平成28年	ヘルスプロモーション・公開講座委員会	
平成29年	地域連携委員会	

図 1. ヘルスプロモーション事業を所管する委員会および豊田市との連携

地域連携委員会である。委員会の名称やその審議事項は異なるが、これらの委員会は、ヘルスプロモーション事業や公開講座に関することを所管しており、平成 29 年からはそれに地域の医療従事者を対象とした研修会が加わった。

本学のヘルスプロモーションの活動は、図 2 に示すように、豊田市との共同事業、特定地域に密着した活動、公開講座に大別できる。

豊田市との共同事業としては、豊田市と本学との包括連携に関する協定に基づいてヘルスプロモーション事業を実施した。平成 25 年 3 月 29 日に締結されたこ

¹ 日本赤十字豊田看護大学

年度	豊田市との共同事業	特定地域に密着した活動				公開講座
平成25年						
平成26年	豊田市保健部地域保健課との連携事業					一般向け公開講座
平成27年	豊田市社会福祉協議会との連携事業	逢妻ふれあいまつり	宮口上フェスタ		豊根村教育委員会との連携事業	
平成28年				宮口一色健康測定健康講座	ブラジル人学校身体測定	
平成29年	本学でのセミナー				防災	
					専門職向け研修会	

図2. ヘルスプロモーション事業の実績

の協定は、豊田市と豊田市内にある大学および高等専門学校が連携して地域の課題に適切に対応し、活力ある個性豊かな地域社会の形成と発展及び人材育成に寄与することを目的として、①知的、人的、物的資源の活用、②共同で実施する事業、③学術振興、教育及び人材育成、④まちづくり事業を行うものである。相互連携機関として、愛知学泉大学、愛知県立芸術大学、愛知工業大学、中京大学、豊田工業高等専門学校がある。その詳細は当時の安藤学長が本学紀要で報告している（安藤，2014）。本協定の有効期間は3年間で、平成28年3月29日に更新されている。共同事業は、豊田市保健部地域保健課とは平成26年から27年まで、豊田市社会福祉協議会とは平成25年から29年まで行っているが、平成29年はその方法を大きく変えた。

特定地域に密着した活動は、逢妻地区、宮口上区、宮口一色区、ブラジル人学校、豊根村で実施した。

公開講座については、地域住民を対象とした公開講座に加えて、平成29年から地域医療従事者を対象とした研修会を開催している。

Ⅲ. 平成25年から平成29年までのヘルスプロモーション事業や公開講座のあゆみ

1. 豊田市との包括連携協定による講座の開催

豊田市との包括連携協定による講座の開催を表1に示した。連携先は、豊田市保健部地域保健課および豊田市社会福祉協議会である。豊田市保健部地域保健課

とは、平成26年に1件、平成27年に3件の講座を開催した。また、豊田市社会福祉協議会とは、平成25年から28年までに5件の講座を開催した。

2. 特定地域での活動

大学の近隣地域である逢妻地区、この地区の自治区である宮口上および宮口一色、ブラジル人学校、豊根村で当該地域のニーズに合致した地域密着型のヘルスプロモーション事業を行っている。

1) 大学の近隣地域での活動

大学の近隣地域において、地域からの依頼に応じて教員と学生が協力してヘルスプロモーション活動を行っている。これは、地域の生涯学習フェスティバルでの健康相談の活動と地区住民むけの健康講座の開催を含む。

豊田市では、毎秋、各地区で生涯学習フェスティバルが開催される。逢妻地区では、逢妻交流館および小清水小学校体育館で行われた「逢妻ふれあいまつり」で、教員とヘルスサポートリーダーが血圧測定、握力測定、棒反応測定、体組成測定等を行い、測定結果をもとに教員が健康相談を実施した。利用者は毎回100名から140名であった。宮口上区では、宮口上公園で開催された「宮口上フェスタ」で活動を行った。本学の教員と学生が血圧測定を行い、その結果をもとに説明を行った。利用者は65名から100名であった。

健康講座の開催は、平成27年から宮口一色区民会館で開始した。平成27年は「若返りの秘訣－タオル

体操と脳トレ」という講座を開講した。平成 28 年は健康測定を行い、「熱中症について」というミニ講座を開講した。平成 29 年にはこれらに加え、嚥下・呼吸機能を向上させる「つばめ体操」を日赤豊田学生つばめ隊が実施した。日赤豊田学生つばめ隊は、つばめ体操を普及し、地域高齢者の摂食嚥下機能の向上に貢献するために、高齢者の摂食嚥下機能とケアの講義を受講し、つばめ体操を習得した学生で構成されている。講座等の実施に当たっては、担当教員が高齢者クラブなどの当該地域の住民と入念な打ち合わせのうえで行っている。

2) ブラジル人学校での活動

わが国の在留外国人約 230 万人のうち、ブラジル人は 18 万人余りで、その 1/4 以上が愛知県に住んでいる。その中でも、特に多くのブラジル人が家族で暮している豊田市にはそのコミュニティや学校があり、言葉、文化、健康など多くの課題がある。平成 28 年から伯人学校イーエーエス豊田を本学の教職員が年 1 回訪問し、平成 28 年は 65 名、平成 29 年は 116 名の身長、体重、血圧、骨密度の計測を行った。学校長によれば、ブラジル本国では年 2 回の身体計測があるが、ここでは実施しておらず、この活動の継続を希望するとのことである。

3) 豊根村での活動

豊根村は、愛知県北東部、奥三河にあって北は長野県、東は静岡県と境を接し、村のいたるところに溪流

が流れる自然豊かな山村である。長野県根羽村との境には愛知県内最高峰である標高 1,415m の茶臼山があり、春は芝桜、夏は避暑やキャンプ、秋は紅葉、冬はスキーを楽しむことができる。豊根村の人口は 1,165 人、人口密度は 7 人 / km² である（平成 29 年 7 月 31 日現在）。人口密度を豊田市と比較すると、豊田市の平均が 464 人 / km² であり、このうち挙母地区が最も高く 3,402 人 / km²、最も低い稲武地区でも 24 人 / km² である。豊根村の 9 割が山林とはいえ、それに近い自然条件の豊田市稲武地区よりもはるかに過疎化が進んでいる。また、少子高齢化が顕著に進み、平成 22 年国勢調査における若年者比率は 10%、高齢者比率は 46% となっている。本学では、平成 24 年から豊根村教育委員会と連携して高齢者を対象とした公開講座を開講している（表 2）。

3. 地域住民を対象とした公開講座

地域住民を対象とした公開講座を、毎年 4～5 回開講した（表 3）。また、本学で開催した学術集会の一部を市民公開講座とした。平成 26 年の日本赤十字看護学会学術集会では「赤十字の看護と新島八重」、平成 29 年の東海学校保健学会では「昆虫から学ぶ自然と人間－人間と自然を昆虫の目で見たら－」を市民公開講座とした。

表 1. 豊田市との包括連携協定による講座の開催

連携先	年度	講座の表題
豊田市保健部地域保健課	平成 26 年	アロママッサージテクニックによるリラクゼーション体験会【母性看護学】
	平成 27 年	ヘルスサポートリーダー支援研修【地域看護学】 おとなのためのアロママッサージテクニックによるリラクゼーション体験会【母性看護学】 ヘルスサポートリーダー減塩啓発研修会【成人看護学】
豊田市社会福祉協議会	平成 25 年	私たちらしい選択に向けて【母性看護学】
	平成 26 年	ストレスとうまくつきあおう！【精神看護学】 知って安心。認知症【老年看護学】
	平成 27 年	知って安心。認知症【老年看護学】
	平成 28 年	ストレスと上手につきあおう！【精神看護学】

【 】内は講座担当者

Ⅳ．ヘルスプロモーション事業の変革

1. 連携目的の明確化

平成 25 年 3 月に締結した豊田市との包括連携協定により、本学は公開講座を豊田市保健部地域保健課および豊田市社会福祉協議会と共同開催を開始した。それ以来、豊田市保健部地域保健課とは 2 年間に 4 件、豊田市社会福祉協議会とは 4 年間に 5 件の講座を共同開催したが、本学が提供できる公開講座のうち、共催可能なものを先方が選択するという形であり、企画段階での連携は無く、共催は形式的な域に止まっている。豊田市と本学双方の活動の可能性を拡げ、関係を円滑にするための連携は重要であるが、現状では連携そのものが一義的な目的となっており、実益が伴わない状態なのは問題である。

豊田市との包括連携に関する協定は平成 28 年 3 月に更新されたが、双方のヘルスプロモーション事業を担当する現場レベルでは上述の問題が顕在化し、連携の在り方を見直す時期が来ており、実際に豊田市の保健師からも問題提起があった。保健師の行う事業では、対象集団の特性を客観的に把握し、有効なアプローチを検討することが重要となる。具体的には、対象集団を性、年齢階級、生活圏などで区分し、アプローチするターゲットをきめて、その区分集団に対して最も効果的なアプローチ方法を検討する。そのような仕事をしている保健師にとって、本学の教員の専門に応じて行う公開講座は、住民の健康教育としてみれば、対象分析が不十分と映る。

コミュニティヘルスにおける協働 (Collaboration in Community Health) は、概念分析によると、「ハイリスク集団の健康増進、専門職の実践・教育・研究の向上、参加者・組織やコミュニティのエンパワメン

トをもたらすために、異なる立場の人々・組織が参加し、共通の企画や業務に対して、お互いの関係を形成し発展させながら、ともに活動しあい調整しあうプロセスもしくは戦略」と定義されるが (鈴木, 2006)、各教員の専門性に重点を置く公開講座でこれを行うことは困難である。また、本学が公開講座を開講できる時期は、講義や実習の少ない 1 月から 3 月で、連携先のニーズに合わない。そこで、豊田市との包括連携に関する協定の目的が、多様な連携による活力ある個性豊かな地域社会の形成と発展及び人材育成への寄与であることを再認識し、それを実現する実質的な連携をするため、これまでの公開講座を共同開催する方法をやめて他の道を探ることにした。

2. 豊田市社会福祉協議会との連携

豊田市社会福祉協議会との連携は、これまでは本学の公開講座を共催する形であったが、上述の理由から平成 29 年の共催は行わず、代わりに本学の学生の教養を深めるために地域住民の力を借りるという形をとった。最初の取り組みとして、「経験者から学ぶ多文化」というランチョンセミナーを 5 回開催した (表 4)。1 回目が日本人とアメリカ人の考え方の違いや、アメリカでの出産・育児体験、2 回目が本場の烏龍茶を味わいながら台湾での生活・文化にふれる、3 回目がパナマの文化・風習、4 回目がカレーを食べながらスリランカの生活習慣、5 回目が豊田市国際交流協会の事業紹介を行った。学生のお昼休みの 30 分間という短い時間ではあったが、14 名から 53 名の学生が参加し、興味深い講義であったという感想を得た。しかし、先方からの一方的なサービスという趣きが強く、連携事業としては、互酬性が不十分であった。次年度以降は、多様な方法で互酬性を確保しつつ地域住民の

表 2. 豊根村教育委員会との連携事業

年度	講座の表題
平成 25 年	毎日笑って認知症を予防しよう【老年看護学】 健康長寿のひけつ【地域看護学】
平成 26 年	生涯現役、健康でいきいき一人ひとりが健康づくりの主役—【地域看護学】
平成 27 年	ストレスと上手につき合おう！【精神看護学】
平成 28 年	おとなのためのアロママッサージによるリラクゼーション体験会【母性看護学】
平成 29 年	からだところのストレスケア—癒しのタクティールケア (軽擦法) 体験会—【豊根村プロジェクト】

【 】内は講座担当者

表 3. 平成 25 年度から 29 年度の公開講座

年度	講座の表題
平成25年	からだのしくみと病気ー顕微鏡を通して見える世界ー【専門基礎】 心を病む人に寄り添う介護の基本【精神看護学】 子どもの体とこころを育む遊びの実際【小児看護学】 生活習慣を見直そう！【成人看護学】
平成26年	赤十字の看護と新島八重【日本赤十字看護学会 市民公開講座】 シリーズ不妊症を学ぶ①ー私たちらしい選択に向けてー【母性看護学】 シリーズ不妊症を学ぶ②ー妊娠力を高める食事について考えよう！ー【母性看護学】 子どもの体とこころを育む遊びの実際【小児看護学】 生活習慣を見直そうー質の良い睡眠を促す工夫ー【成人看護学】
平成27年	喫煙者のいないまちづくり【専門基礎】 シリーズ不妊症を学ぶ①ー私たちらしい選択に向けてー【母性看護学】 シリーズ不妊症を学ぶ②ー妊娠力を高める食事について考えよう！ー【母性看護学】 子どもの体とこころを育む遊びの実際【小児看護学】 知ろう！防ごう！感染症【基礎看護学】
平成28年	シリーズ不妊症を学ぶ①ー私たちらしい選択に向けてー【母性看護学】 シリーズ不妊症を学ぶ②ー妊娠力を高める食事について考えよう！ー【母性看護学】 身体のアライメントを整えよう【基礎看護学】 認知症についてー認知症はだれでもなる可能性がある身近な病気ですー【老年看護学】
平成29年	昆虫から学ぶ自然と人間ー人間と自然を昆虫の目で見たらー【東海学校保健学会 市民公開講座】 こころの病とこころの癒しーこころの病をきっかけに発見する新しい自分ー【精神看護学】 シリーズ不妊症を学ぶ①ー私たちらしい選択に向けてー【母性看護学】 シリーズ不妊症を学ぶ②ー妊娠力を高める食事について考えよう！ー【母性看護学】 子どもの体とこころを育む遊びの実際【小児看護学】

【 】内は講座担当者

表 4. 平成 29 年度豊田市社会福祉協議会との連携

日付	ランチオン・セミナーの表題	ゲストスピーカー
10月19日	日本人とアメリカ人の考え方の違い	山村 史子
11月1日	烏龍茶を味わいながら台湾の文化に触れる	瀧沢 徹
11月15日	パナマの文化・風習について	加藤 健二
11月29日	スリランカの生活習慣を知ろう(カレーの試食あり)	谷山 芳和
12月6日	豊田市国際交流協会の事業紹介	山村 史子

力を借りられるように工夫をする必要がある。特に、豊田市社会福祉協議会は、豊田市における地域福祉の推進を図ることを目的に多様な活動を行っており、本学の学生がボランティアでその活動に参加することができる。このようなかわりを通じて、学生が社会福祉協議会の活動に関心を持ち、希望者がその活動に参加できることが望まれる。

3. 地域に密着した活動

効果的なポピュレーションアプローチをするためには、対象集団の特性を客観的に把握し、有効なアプローチを検討することが重要となる。そこで、平成 27 年から宮口一色地区では、担当教員が中心とな

り、講座などの受講者となる当該地域の住民、特に高齢者クラブと入念な打ち合わせをしたうえで、講座等を行っており、特定地域のニーズに合致したヘルスプロモーション事業となっている。また、豊根村では、平成 29 年 3 月に「豊根村プロジェクト」を立ち上げ、プロジェクトチームを中心に地域のニーズに見合った講座の開催を継続するとともに、山村過疎地域での災害や防災に着目した活動を、村の職員、保健師、消防団と協力して行う予定である。さらに、今後は、ブラジル人学校での活動も対象集団の特性を客観的に把握して生徒の健康教育につなげたいと考えている。

表 5. 平成 29 年度の専門職向け研修会

日付	研修会の表題
8月17日	最新文献を用いてマタニティ・ヨーガの効果を説明できますか？ －マタニティ・ヨーガの文献の批判的検討－
9月1日	誤嚥させない食事介助－演習であなたの食事介助方法を確認してみませんか－
9月30日	もう一度学びたい「看護過程シリーズ」①アセスメント
10月7日	もう一度学びたい「看護過程シリーズ」②看護診断から看護計画
11月18日	小児科医と学ぶ正直な診療と研究
2月15日	保育園や幼稚園および学校における専門性のある健康管理方法を学ぼう！ －児童生徒のセルフケアを目指した健康管理－
3月6日	はじめての看護研究

4. 地域の医療従事者を対象とした研修会

平成 29 年から地域の医療従事者を対象とした研修会を行った（表 5）。本学では医療従事者を対象とした研修会は初めてであり、知名度不足から参加者数は多くはない。今後は、知名度を上げる活動とともに、研修内容が地域の医療従事者に見合ったものかの評価も求められる。

V. おわりに

平成 25 年 3 月に豊田市と本学との包括連携に関する協定が締結され、その協定に基づいてヘルスプロモーション事業を実施してきた。平成 25 年から平成 28 年には、豊田市との共同事業、特定地域に密着した活動、公開講座を行った。しかし、豊田市との共同事業では、双方のヘルスプロモーション事業を担当する現場レベルにおいて連携上の問題が顕在化し、その在り方を見直す時期が来ている。活力ある個性豊かな

地域社会の形成と発展及び人材育成への寄与という連携の本来の目的に立ち返り、多様な活動により地域住民のニーズを満たしつつ双方の組織を活性化する互酬的な連携を目指す必要がある。

文献

- 安藤恒三郎 (2014). 豊田市との包括連携について. 日本赤十字豊田看護大学紀要, 9 (1), 3-7.
- 黒川景 (2014). 日本赤十字豊田看護大学公開講座のあゆみ：手作りの情報発信・地域とのふれあい. 日本赤十字豊田看護大学紀要, 9 (1), 15-21.
- 杉山希美, 永井道子, 清水美代子 (2014). 地域と連携したヘルスプロモーション事業. 日本赤十字豊田看護大学紀要, 9 (1), 9-13.
- 鈴木良美 (2006). コミュニティヘルスにおける協働 (Collaboration in Community Health) —概念分析. 日本看護科学会誌, 26 (3), 41-48.